2023年9月3日

年間第22主日

菊地功大司教　メッセージ

今年の夏は、例年以上の早くから台風の影響があり、特にお盆の帰省時期に台風が重なって交通機関に影響が出たりしました。まだ台風シーズンは終わっていませんから今後どうなるか想像もできませんが、これまでのこの夏の洪水や土砂災害の被害を受けられた方々には、心よりお見舞い申し上げます。

線状降水帯という言葉も、少し前までは集中豪雨などと言っていましたが、だんだんと耳に慣れてきました。わたしは30年くらい前に、赤道直下のアフリカのガーナで働いていましたが、日本で言う夏はちょうどガーナでは雨期でありました。雨期と言っても朝から晩まで降っていることはなく、午後2時過ぎくらいから、やにわに雲が沸き立ち、すさまじいスコールが降ったり風が吹き荒れたりしたものです。確かにこの数年、日本の気候は荒々しくなり、まるでかつてのアフリカのような気候になりました。いわゆる温暖化による気候変動の結果、なのでしょう。

気候変動の様々な影響が語られ、その原因が様々に取り沙汰される中で、2015年、教皇フランシスコは「ラウダート・シ」という文書を発表されました。この文書の副題は、「ともに暮らす家を大切に」とされています。広く環境問題に取り組むことが、神が創造され、人類にその管理を託された自然界を、養い育てる責務を果たすことにつながり、それは信仰上の責務でもあると強調されました。

教皇様は、毎年9月1日を「被造物を大切にする世界祈願日」とさだめ、日本では9月の第一の日曜日にこの祈願日を定めています。またアシジのフランシスコの記念日である10月4日までを、被造物を保護するための祈りと行動の期間として、「被造物の季節」と定められました。

ここで教皇フランシスコが強調されるエコロジーへの配慮とは、単に気候変動に対処しようとか温暖化を食い止めようとかいう単独の課題にとどまりません。「ラウダート・シ」

の副題が示すように、課題は「ともに暮らす家を大切に」することです。それは、「この世界でわたしたちは何のために生きるのか、わたしたちはなぜここにいるのか、わたしたちの働きとあらゆる取り組みの目標はいかなるものか、わたしたちは地球から何を望まれているのか、といった問い」(160)に、ひとり一人が真摯に向き合うことに他なりません。

日本の教会は同じ期間を、さらに視点を広げて、「すべてのいのちを守る月間」として、司教団のラウダート・シ・デスクが、様々な活動を呼びかけています。

環境への配慮をすることは、いまわたしたちが享受している生活を変えていくことを意味しているため、容易なことではありません。しかし、神がこの世界を創造し守り育み管理するようにとわたしたちに託した意図を考えれば、福音にあったように、「神のことを思わず、人間のことを思っている」とわたしたちも主から叱責されるものであるのは間違いありません。

主イエスが、「自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい」といわれるとき、それは苦行を強いているのではなく、神様の計画を最優先に考えて、人間の都合を捨て去るように求めておられるに違いありません。